

私本太平記 (一)



吉川英治全集

第39卷

編纂委員

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作權者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・39 私本太平記(一)

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式講談社

東京都文京区音羽二―二二(大代表)
電話東京九四二局二二―二二 郵便番号 一一二
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特漉

第一刷発行 昭和四十四年一月二十日

定価 六百八十円

© 一九六九年 吉川英治

目次

あし かが 帖	婆 娑 羅 帖	み な か み 帖	帝 獄 帖
---------------	------------------	-----------------------	-------------

三

二三

三三

三五

私
本
太
平
記

(一)

あ
し
か
が
帖じょう

下天地蔵

まだ除夜の鐘には、すこし間がある。

とまれ、ことしも大晦日まで無事に暮れた。だが、あしたからの来る年は。

洛中の耳も、大極殿のたたずまいも、やがての鐘を、偉大な予言者の声にでも触れるように、霜白々と、待ち冴えている。

洛内四十八カ所の簀屋の火も、つねより明々と辻を照らし、淡い夜霧をこめた異の空には、羅生門の薨が、夢のように浮いて見えた。その楼上などには、いつも絶えない浮浪者の群れが、あすの元日を待つでもなく、飢えおののいていたかもしれないが、しかし、とにかく泰平の恩沢ともいえる事には、そこらの簀番の小屋にも、町なかの灯にも、総じて、酒の香がただよっていた。都の夜霧は酒の匂いがするといってもいいほど、まずは穏かな年越しだった。

『さ、戻りましょう。……若殿、又太郎さま。……はて、これは困った。いつのまにやら、邪気も無う、ようお寝みだわ』
一色右馬介は苦笑した。ゆり起しても、若い主人の寝顔は、

居酒屋の床几に倚った儘、後ろの荒壁を背に、ぶらぶら動くけなのである。

『これはちと、参らせすぎたな。やはりお年はお年』

右馬介は侍者として、急に自分の酔をさました。ここは錦小路の、俗に「諸酒屋」とも「小酒屋」ともよぶ腰かけ店だ。こんな所へ、御案内したと知れただけでも、あとで上杉殿からどんなお叱りを受けるかと。

かつて、自分は六波羅の大番役も勤め、都は何度も見ていたが、又太郎きみには、初めての御見物だ。すべてが、もの珍らしくてならないらしい。

所で、こんどの上洛では、彼も驚目したことだが、なんと都には、酒屋が殖えたものだろう。——という感を、この亭主にただして見たら、十年前には醸造元の「本酒屋」も百軒とは無かったものが、当今では洛中だけでも二百四、五十軒をこえ、その上、近江の百濟寺で造るのや、大和菩提寺の奈良酒だの、天野山金剛寺の名酒だの、遠くは、博多の練緯酒までが輸入されてくる有様なので、請売の小酒屋も、かくは軒を競っておりますので、と言うことだった。

なるほど、これは自分たちの国元、関東などでは見られない。

だが、この凄まじい酒屋繁昌は、人心の何を語っているものか。ただ単に、これも泰平の余沢といえる現象なのか。

主従しての、そんな話から浮いて、つい、

『何も土産ぞ。奈良酒とやら百濟酒とやら、ひとつ、飲みくらべてみようではないか』

と、なったものだ。

これは、又太郎から、言い出した事としても、こんなに迄飲ませてしまったのは、重々自分も悪かった、と思うしかない。

『若殿、若殿。もはや相客とて、たれ一人おりませぬ。さ、立ちましょ。除夜の鐘もそろそろ鳴る頃……』

又太郎は、やっと眼をさました。醒めた顔は、いとど、あどけないほど若々しくて、唯まぶしげにニヤリと笑う。そして、直垂の袖ぐちで、顎のよだれを横にこすった。

『ああ、よいここちだった。右馬介、よほど長く眠ったのか、わしは』

又太郎は伸びをした。その手が、ついでに、曲がつていた烏帽子を直した。やっと現に返った眼でもある。

その眼元には、人をひき込まずにいない何かがあった。魔魅の眸にもみえるし、慈悲心の深い人ならではの物にもみえる。どっちとも、ふと判別のつきかねる理由は、ほかの部分の、いかつい容貌のせいかもしれない。

骨太なわりには、瘦肉の方である。顎のつよい線や、長すぎるほど長い眉毛だの、大きな鼻梁が、どこか暢びり間のびしている所など、これは西の顔でもなし、京顔でもない。坂東者に多い特有な骨柄なのだ。それに、幼いときの疱瘡のあとが、浅黒い地肌にも妙な白っぽさを沈めており、これも女子には好かれそうもない損の一つになっている。

けれど今、従者の一色右馬介にゆり起されて、無言でニッと見せた羞恥み笑いや、大どかな風貌の魅力さといったらない。きつとこの郎党は、この若いおあるじの為には、どんな猥身も誓っているのではないかと思われる。

とにかく、醜男の方ではあるが由緒ある家の子息ではあろう。佩いている太刀なども、こんな小酒屋の客には見ぬ見事な物と、亭主もさきから、眼をみはっていた様子だった。

『されば、お眠りはつかのまでしたが、昼、六波羅を出たばかり。さだめし、上杉殿のお内でも、この深夜まで、どこを何し

て歩いてぞと、お案じのことに相違ございませぬで』

右馬介の分別顔を、一方は屈託もなく笑い消した。

『ばかな、そんな心配をだれがするものかよ。こたびの上京こそは、せつかく、よい見学として、諸所、くまなく見て帰れとは、国元の父上のみならず、六波羅の伯父上も、くどいほど申された事だ。まして、右馬介も付いておる事と』

その儀は、とく心得ておりますが、程なく元旦にもなりますことゆゑ』

『そうだ、除夜だなあ。ことしの除夜の鐘を、都で聞こうとは思わなんだぞ。明くれば、又太郎も十八歳。右馬介、おまえとは幾つちがいだっけな』

『ちょうど、十歳上に相成ります』

『十の違いか。わしがその年になるまでには、きつともう一度、都へ上る日があろうぞ。鎌倉のありかたと言ひ、眼に見た都のさまと言ひ、これがこのままの世でいるわけはない。おやじ、もう一壺、酒を持てまいれ』

『や。そのように、お過ごしなされては』

『なぜか今夜は、腸がわしへ歌うのだ。飲むべき夜なれと、腸が申す。まあ、そう言うなよ右馬介』

分別は、こちら以上にあるお人である。きかない御気性である点も、日頃の練武修学、すべてにおいてなのだから、かくなつてはお守役の右馬介も、黙って控えてしまふしかない。

と、そのとき、まるで木枯しでも吹きこんで来たように、この小酒屋の軒ばから、

『オオ。ここはまだ開いていたぞ。酒だ、酒だ。おやじ、それに何ぞ温い物でもないか』

と、妻まじい人々の吐く白い息が、どやどやと、土間いっぱいに込み入って来た。

たちどころに、土間は小酒屋らしい混雑と雑言で、埋まっていた。十数名の武者は、みな小具足の旅姿だった。といってもあらまは、足軽程度の人態にすぎない。争いあって、一碗ずつの酒を持ち、干魚か何かを取ってはムシヤムシヤ食う。そしてやや腹の虫がおさまりと出ると、こんどは野卑な戯れ口で果てしてもない。

彼らには、片隅の先客など、眼の外だった。又太郎の方でも、思わぬ光景を肴として、声も低めに、ひそと、ただ杯を守っていた。

『右馬介。……どうやら鎌倉者らしいな』

『左様で。話ぶりでは、鎌倉から紀州熊野へ、何かの御用で行った帰路の者かと察しられますが』

『む。うなずかれる事がある。先ごろ、熊野新宮へ御寄進の大釜一口に、大檀那鎌倉ノ執権北条高時と、御銘を鑄らせたものを運ばせたとか伺っていた。その帰りの一と組だろう、この輩も』

『さてこそです。どうも最前から、犬を連れているのは妙だなと、見ておりましたが』

『なに犬を。どこに』

——犬の一語が、ふと彼らの耳を刺したとみえる。大勢の眼が初めて、ぎょろと、二人を見た。

だが、又太郎の視線とは、ぶつかり合うよしもない。

なるほど、立派な犬が人々の蔭にいたのだ。紀州犬としても優れた名犬にちがひなからう。琥珀色にかがやく眼、黒く濡れ光っている鼻頭のほか、全身の毛は雪を思わせる。そして大きなこと、白熊のようなと言ってもよい。

『はあ、御献上物だな、この犬殿も』

酒板に頬杖ついて眺めつつ、彼の醉眼にはその犬が、だんだ

ん、北条高時その人みたいに見えてきた。

高時が、鎌倉御所のうちで、そうであるように、この犬も、武者足軽の群臣をしたがえ、旅路にも持ち歩かせているらしい高麗縁の半畳を土間に敷かせ、その上へ、ゆったりと、尻をすえているのである。

首輪は太綰の紅白の絹つな、銀のかざり鎖。わきには、布直垂の大飼が二人、主に仕えるごとく付添っていた。そしてここへ着くやいな、犬殿への供御の物を、まず第一にと、さきけていた。

『……………』

滑稽である。じつにおかしい。おそらく又太郎には、犬好きな執権の有名な犬痴性が、この奇妙な実在によって、よけいおかしく思い出されていたものだろう。

現執権高時の田楽（土俗的な歌舞）ずきも、狂に近いが、闘犬好みは、もっと度をこしたものである。鎌倉府内では、月十二回の上覧闘犬があり、武家やしきでさえ闘犬を養って、それを美食で肥えさせるのに、憂身をやつきぬ者は少いとか。だから名犬といえば、錢百貫から数百貫の高値をよび、わけて高時自身の愛犬が、あまたの家来に護られて道を行けば、往来人は笠をぬいで、路傍にひざまずくといった風な奇観も珍らしくはないという。

『……ふ、ふふふふ』

つい、又太郎は、独り笑いを杯に咽ばせてしまった。と共に、酒に酔った犬飼の手綱を抜け、いつのまにか側へ来て、自分の足もとを嗅いでいた紀州犬の鼻ツラを見たので、いきなり足をあげて蹴飛ばした。——それは、まったく彼の意識なき衝動か、酒興の発作ではあったらしいが。

人間共に仕えられて、近ごろ驕っていた犬である。

けんっ——

と、するどく悲鳴して、四肢を退くと、怒りを眸に示して、ひくく唸った。

犬以上に驚いたのは、飲みはしゃいでいた人間共の方である。場所はずまい小酒屋の土間——素破といっても、小早い身うごきは出来っこない。どっと、壁を背にした空間を前に作って、さて、あらためて一せいに相手の在る所を睨めすえた。

『やいっ。——蹴ったな、蹴りおったな。神宮の禰宜どのから、鎌倉殿へ御覧に入れようがため、おれ共が預かって、道中これまで護って来た大切な、おん犬をば』

率領は、足軽頭か。

太刀のつかを叩いて、犬の代りに、吠えている。

『は、は、は。……おん犬とは』

またしても、又太郎が嘲笑するので、右馬介は気が気でなく、酒板の下で、その袖を、引っ張った。そして、自分が詫びようとも思ってたか、床几の腰を浮かしかけると、

『右馬介、おまえは黙っておれ。わしのした事だ、わしが物申す』

すると、返辞は、足軽頭が奪い取って。

『なに物申すだと。御献上のおん犬に、土足をくれて、なんの言い条がある』

『ある』

又太郎は、残りの一杯を、ゆっくり飲みほした。

『犬に訊け。蹴ったのではない。足で頭をなでてやったまでの事だ』

『ば、ばかな言い抜けを。蹴られもせぬおん犬が、なんであんな声を立てるものか』

『いや、獣がしんじよろこぶと、ああいう声を出すものだ』

『こいつめが、人を小馬鹿にするもほどがある。酔うての上の悪戯かと思えば、さては故意にやったな。検断所へつき出してやる。さあ立て。者共、そいつらを引っぱり出せ』

『まあ、待て、わしの言が、うそかほんとか、見た上にしても遅くあるまい。これこれ、そんな犬殿の家来。もいちどわしの前へそれを曳いて来い』

『どうする』

言ったのは、大勢の端で、犬を抑さえていた布直垂の犬使らしい男だった。

『——おれが抑さえていればこそだが、押ッ放したら、汝のどこへ嚙ぶりつくかも知れぬぞよ』

『おおよいとも。もいちど足であやしてやる。放せ』

放されたが、犬は一気にバツとは来ない。要心ぶかく、のそのそと近づいた。そして、底知れぬ獺猛きを雪白の毛並にうねらせた。だのに又太郎は、われから革足袋の片方を上げて、彼の鼻ヅラへ見せている。

犬は疑った。ちよつと、姿勢を低くした。が、それは支度か、いきなり桃色の口をかつと裂き、相手の足首へ咬ぶついた。咄嗟に、又太郎はその足を引くことなく、逆に、足のツマ先へ槍のごとき迅さを加え、犬の喉ふかくまで突っこんだ。それは、あるまじき光景だった。異様な絶叫が人の耳を打ち、白い尾も胴体も意気地なくころがった。

いや、それも見ず、又太郎は小酒屋を飛び出していった。幾人かを刎ね飛ばした覚えはある。だが、振向いて後ろへ呼ぶには、数百歩の宙を要した。

『右馬介、右馬介。早く来い。逃げるが一手だぞ』

わざと五条橋を避け、主従とも、七条河原へまぎれたのは、相手の追尾よりも、帰る先と、身分を知られることの方が、よ

り恐かったからにちがいない。

『いやどうも、若殿のお悪戯には、驚きまいた。物にもよりけり、相手にもよるものを』

『やはり酒のなせる業だったな』

『そんなお悪い御酒癖とは、ついぞ今日まで、右馬介も存じませんでしたが』

『ははは。犬も悪かった。あの傲慢な生き物が、わしには、まざと、鎌倉の執権殿そっくりに見えてきたのだ。そこが酒だな。もう余りは過ごすまい』

『ここは闇の河原、御放言も、まず大事ごいませぬが、そんなお胸の底のものは、他所では、ゆめ、おつしみなされませ。先刻の小酒屋でのお振舞なども、金輪際、御口外は』

『右馬介は、いつ迄わしを子供と思うてぞ。知っている。心得ておるよ。……ところで、除夜の鐘はまだか』

『はて。除夜はとうに過ぎております。やがて東山の空も白みましようず』

『では、はや元日か。さても、おもしろい年を越えたな。今年は初春の夢占もよからん気がするぞ。なあ右馬介、もう寝るまもあるまい。宿所へ戻って、若水でも汲むとしようよ』

やがて二人の姿が帰って行った先は、北ノ六波羅の一郭だった。

むかしは平家一門の車駕が軒なみの豊に映えた繁昌のあとである。平家亡んで、源ノ頼朝、実朝の幕府下にあったのもわずか二、三十年。——以後、北条氏がとって代ってからは、中興のひと北条泰時の善政、最明寺時頼の堅持、また、元寇の国難にあたった相模太郎時宗などの名主も出て、とまれ、北条家七代の現執権高時の今にいたるまで、南北の六波羅探題以下、評定衆、引付衆、問注所執事、侍どころ所司、検断所、越訴奉行

などのおびただしい鎌倉使臣が居留しているその政治的聚落も、いつか百年余の月日をここにけみしていた。

夜はしらむ。

年輪をかさねた六波羅松の松の奏でに。

近くの八坂ノ神の庭燎、祇園の神鈴など、やはり元朝は何やら森厳に明ける。

明けて、ことしは元亨二年だった。

ただしく過去をかぞえれば、武家幕府の創始者、頼朝の没後から百二十二年目にあたる初春である。

又太郎は一室で、清楚な狩衣に着更え、烏帽子も新しくして、若水を汲むべく、庭の井筒へ降り立っていた。

彼の伯父なる人とは、六波羅評定衆の一員、上杉兵庫頭憲房である。ここはその邸内だったのはいうまでもない。

『ア、都は早い』

井筒のつるべへ手をかけながら、又太郎はゆうべの酔の気もない面を、梅の梢に仰向けた。

『——国元のが家の梅は、まだ雪深い中だろうに……。右馬介、ここのはもうチラホラ咲いているの』

『お国元の御両親にも、今朝は旅のお子のために、朝日へ向って、御祈念でございましようず』

又太郎に、返辞はなかった。彼も若水の第一をさきげて、まづ東方の人に、拝をしていた。

彼にとれば、ここは旅先の仮の宿所だ。ひまで、のんきで、身をもてあますほどである。

が、伯父の上杉憲房には寸暇も見えない。元日の朝、大書院から武者床を通した広間で、家臣の総礼をうけたさい、共に屠蘇を祝ったりはしたが、あとは顔を合せる折すらなかった。

次々の賓客を迎え、客がとぎれると、彼自身、駒飾りした騎

上の人となつて出て行くし、夜は夜で、探題からの迎えがくる。

『いや、六波羅勤めも忙しいものだ。伯父上が口ぐせに、帰国の日を待つお気持ちもわかる』

二日の昼。

彼は一ト綴の和歌の草稿をふところに、冷泉為定の四条の住居を訪ねていた。為定は後に『新千載和歌集』を撰した当代著名な歌人である。東国育ちの武家の子又太郎にしては、そんな文雅な人を訪うのはためらわれたが、これは母との約束だった。

元来、母系は勧修寺家の公卿出であつたから、彼の母もわが子を唯あじけない坂東骨一辺の粗野な武人には仕立てたくはなかつたのだらう。兵家必修の日課のほか、つねづね彼へ和歌の学びをもすすめていた。そしてこんどの上京には、ぜひ冷泉どの門をたたいて、末長く詠草を見ていただくようにお願いせよと、手紙まで持たせられて来たのであつた。

折よく、在宅していた為定は、

『おう、めずらしいお文』

と手にした仮名文をなつかしみ、さてまた、これがその人の子息かと、ひと間のうちに、しげしげと見て。

『ほ。其許がこのお便りにある足利清女どのの御嫡男かの』

『いえ……』と又太郎は、うすらあばたの頬を、どぎまぎ紅くして、さらに居ずまいを改めた。

『――早速でしたが、兄義高があり、私は次男にございまする』

『が、まあ、兄君がおわさねば、其許がお世継じやろうが。し御官位は』

『申しおくれました。――下野国足利ノ庄の住、貞氏の次男、

足利又太郎高氏といひます。十五で元服の折、治部大輔、從五位下をいただきましたが、何もわからぬ田舎者で』

『御卑下にはおよばぬ』

為定は、うちけして。

『下野足利ノ庄といへば、天皇領の御住人』

『はい。足利ノ庄の内には、世々、八条院の御旧領があり、それが今上の御料に移されておりますゆゑ、畏れあれど、申さばわが家は、朝廷の一被官でもござりまする』

『それ御覧じ。お血筋といへば北条殿には劣らぬ正しい源家の流れ。家職といへば現帝の御被官。なぜ、遠いお旅をば、供人も召されず』

『とかく、故なき上洛は、鎌倉の幕府の忌む所でございまする。が、父貞氏の健かなうち、少しなと世上の見聞を広うしておきたいものと、たつて父母にねだつて出て参つたのです。忍びやかでこそ、六波羅の身寄の家にも置かれますので』

『なるほど、朝家の御被官であるだけでなく、幕府の御家人でもおわせられたの。こりや、むずかしからう』

やはり世事にはうとそんな老歌人の言である。為定は抜け齒の多い口をあいして笑つた。

老歌人の為定から「……お供も召されずお一人でか」と、いぶかれたのもむりはない。

いつもの右馬介さえ今日は連れていなかったのだ。都は知らず東国では源氏の名流、武門の雄と見なされている足利氏の曹司である。ゆらい遠国者の上洛ほど派手をかぎって来るものといわれているのに、飄として、一人で門を叩くなどはおかしい。先で偽者と過まられなかったのも、思うに、彼にはこんな場合もあらうかと、とくに心をつかつてくれたらしい母の添文のお蔭だった。

彼にもそれが分つていよう。やがて為定の門を辞して、あてどなく町を行くうち、ふと、石の地藏尊を路傍に見かけると、何やら袂の物を供物にささげてそれへ額ずいていた。それは為定の家で茶菓子に出た粉熟であつたが、甘葛と餅で作った美しい五色の菓子は、彼がまだ手を合わせているうちから、そこらにいた貧しげな童たちが、互いに翡翠みたいな鋭い眼でねらっていた。もちろん又太郎は、自分が十歩と去らないうちに、供物が消えてしまうであらう事も知っている。

——が、又太郎には快かつた。いつからか、母は地藏尊を信仰していて、「そなたを生んだ難産の折もお救いであつたし、そなたの瘡瘡の軽うすんだのもお蔭であつたぞや。どうぞ、そなたも生涯の守護仏として給へ」と、何度聞かされていたことかしかない。

でも、これ迄は、そんな心にもなれなかつたものが、ふと旅の路傍で、こたわりもなく、今のような姿を神妙に彼が見せたのは、これも母と離れて、かえつて、子の中に、母がほんとに分つていたからであらう。——で、彼は途々、母がよく夜語りにした地藏尊の仏説などを、独り想いつづけながら歩いた。

羅刹地獄の六道の娑婆苦も能く救うというお地藏さまも、まことは、一仏二体がその本相であり、半面は慈悲をあらわしているが、もう半面の裏のおすがたは、忿怒勇猛な閻魔王であつて、もともと一個のうちに、大魔王と大慈悲との、二つの性を象つているのですよ、と母はよく言つた。——幼い耳に沁み込めたそのふしぎさや怪しさが、彼にはいまだにこびりついている。

『……そうか。地藏の両面とは、つまりは、そのままの又太郎高氏のことだつた。わが子の両面をよう知っている母上が、それで、たびたびこのわしに』

彼はその日、心にきめた。母のことばに従つて、地藏菩薩を以て終身の守護にしようと思つたのである。

六波羅はもう夕の灯だつた。彼の姿を見ると、右馬介はすぐ侍部屋から走り出て迎えたが、なにか訝えない容子ですぐ告げた。

『若殿。ついにこの御宿所を嗅ぎつけてまいりましたぞ』

『嗅ぎつけて。……誰がだ』

『大晦日の小酒屋での』

『あ。あの大家来どもか。それが』

『探題殿へ訴え出た為、検断所から何やら御当家へきついお沙汰のようです』

『足利又太郎と知つたのか』

『その程は分りませぬが、上杉殿には、甥どのが立帰つたら、すぐにも旅支度して、東へ帰れとの仰せなので』

『伯父上は、奥か。——いや旅支度など急がずともよい。ちやうどおいでなれば、ほかにもお願いもある。さは案じるな、右馬介』言いつて、彼はすぐ奥へ入つた。

『和殿の六波羅泊りも、はや二十日余りだの。洛中洛外の見物も、まずは、あらましというところか』

『はい。ここをわが家のように、吾儘ばかりして』

『なんの、他人行儀』

上杉憲房は以前からこの甥が好きらしい。短所もよく知っているのである。又太郎の方でもあまたな一族中でもほかならぬ人と、甘えた恃みを抱いていた。それはこの人が、母の兄であるという親近感だけのものではなかつた。

『——その上にもです。右馬介から聞けば、私のつまらぬ悪戯から、御当家へまで、何か、探題殿よりむずかしい御尋問の沙

汰がありましたとか」

『御献上の犬へ、和殿が足を食らわせたとかいうあの事よな。よいではないか。わしはおもしろいと思うておる。ただし鎌倉の執権殿と、そなたの母者には、べつな意味で、いずれへも聞かせられんがの。はははは』

まるで、おだてるような語調だが、すぐ声を落して。

『ま、先刻。右馬介へも申しておいたが、とにかく、こたびの和殿の旅は公ではない。去年の暮、足利の御厨から伊勢の神宮へ、例年の貢あるを幸に、その上納物の列に和殿を加えて、帰路をそつと、この都へ、立ち廻らせたものじゃった。……いちどは都も見せておきたい、という親心と、和殿のたつてな宿願でな』

『はい』

『で。犬の沙汰などは些事とするも、万が一、さる密か事が公となつてはまずい。あとの処理はこの憲房にまかせられ、早うここを立つのが上策ではあるまいかの。旁、都の内にも、もう見る所もあるまいし』

『されば、元より仰せには従いますが、ただもう一事、心残しがございますので』

『まだ、なんぞ？』

『うけたまわれれば明三日、帝には朝覲の行幸（天皇が父皇の御所へ拝賀にゆくこと）あらせられる由。今日、冷泉どのをお訪ねした折、伺いました』

『そりゃ、相違ないが。して』

『いずれば御警固として、六波羅衆も、お立ち迎えいたす事でございましょう。又太郎とて治部大輔、無位の布衣でもございませぬ。立武者のうちに加えて、よそながらでも、御盛儀を拝するわけにはゆきますまいか。せつかく、都へ来あわせてい

た身の冥加に』

憲房は黙ってしまった。甥の熱意に、聞き惚れていたわけではない。当惑顔というものだった。また、若さというものは、分別者には出ない奇想を抱くものだと半ばあきれ顔にも見える。

しかし憲房にも、その願望をかなえてやりたい気は多分にあった。こんどの旅にしても、単なる都見物が当人の目的でもなし、また肉親のすすめでもない。いまの当主貞氏に継いで、いつかは当然、又太郎高氏が、足利一族の棟梁に立つ日がくる。——で、この惣領の教養には、欠く所ないつもりだが、唯、なにぶん東國の一平野に育った儘ではと、それのみは彼の母すら不満としていたからであった。

どう説いたか、または憲房が、すすんで一策を案じたのか。ついに彼の望みはきかれ、よそながらでも、明日の行幸を拝してから帰国と話はきまった。くれぐれ、その直後にはすばやく離京するようにと、憲房は念を押した。伯父甥、それらの相談で夜をおそくした。又太郎はすぐには枕になすめなかった。

大きな御手

あいにく、正月三日の空は、薄曇りだった。そして折々は映す日光が、北山の遠い雪を、ふと臉にまばゆがらせた。

——天皇の鸞輿は、もう今しがた、二条の里内裏をお立ち出でと、沿道ではつたえていた。行幸や御幸を仰ぐのはめずらし

くない都の男女だったが、朝観の行幸と知って「……今日ばかりは」の、ひしめきらしい。

まことに、今上(後醍醐天皇)としても、公な父皇への御訪問は、即位後、初めての御儀だった。今後とて公な御対面としては、御一代あるか無いかもしれないのである。

子が父を訪い母と会うにすら、こんな儀式が必要とされるのも、天皇なればこそ、おわずらいよと、たくさん庶民の中には、その不自然な御環境に「——なんたる、御不自由さか」と、お気のどくを感じた者もいたかもしれない。が、おそらくは万人が万人、それとは逆に、

『おなじ人間と生れながら』

と、金鳳の御輿にある人と、板ぶき小屋に生れついた凡下とをひきくらべて、つい羨ましくも見たであろう。

といっても、人皇九十六代の現世まで、天皇と民とは、生れ出ぬ以前から、こうあるものと、すでに約束づけられていた国土である。それ以上には、何を思いもせず悩みもせぬ群集ではあった。なおさらな事、天皇御自身にも九五の尊を、自由のない不幸な地位などとは、ゆめ御思惟するはずもあるまい。

いや、みかどとしては、むしろ今日の朝観の御儀も「時を得たしるしぞ」として、満足以上なおこち栄えのうちに、未来のおん夢も、さまざまだったのではあるまいか。

今上の後醍醐は、じつに前例のないほどおそい御即位だった。皇太子たるまま十年も臣下の吉田大納言定房の邸に養われ、つい四年前、おん年三十一で、万乗の君となられたばかりである。——時をえて、という御感慨は、今日ばかりのお胸ではない。

やがて。

先駆が通って、しばらくすると、彼方からおん輿の屋根にき

らめく金色の鳳がゆらゆら見えて来た。みゆき先は、つい京極の大炊御門なので、関白、諸大臣、公卿殿上人ら、すべて供奉は徒歩であった。

それにせよ、列の流れは甚だおそい。

せまい四ツ辻などにさしかかると、まるで林みたいに立てた両側の民家の門松の枝が、おん輿の御帳につかえて、内なる竜顔をふとあらわにしたりした。

道に白砂をしき、軒に門松を立て渡す風は、その頃には、正月だけの景色でなく、大行幸やら祭渡御には、令が出て、時を問わぬ慣いであった。が、時により土地によって、竹、さかき、椎、しきみ、椿なども立てたりはする。

いずれはこれも、唐風俗の移入からであろうが、要は、民家の貧しさを蔽う為にあったのだから、帝室では、由来、門松は立てなかった。

ほどなく、おん輿は、京極おもての院の棟門につく。

夙に、お待ちうけらしたたずまいである。院司の上奏あって、すぐ乱声(雅楽部の合奏)のうちに、鸞輿は、さらに中門へ進められた。

みかどの父きみ、後宇多法皇は、まだ五十五、六ておわせられた。が、御愛人の遊義門院の死に会って、御法体となられてからは、俄に、老けまさってお見えであった。

が、ひとつには。

二ノ御子尊治(後醍醐の御名)の即位をやっと見給うたこと。

また、院政という歴代にわたる厄介な二政府の弊も廃して、天皇一令のむかしに復元されたので、「……ます、これで」という御安息やら、閑居のおん空しさなども、手伝うてのことと、侍側や蔭の女房たちは憂いもなくお見上げしている。

どれも当たってはいくはない。